

これまで本システムを「まちなか音声案内システム」という名称を用いてきたが、今後、普及を図っていくために、より分かりやすく親しみやすい名称が必要と考えた。

そこで、ラジオを持って、様々な情報を得る、という意味から「てくてくラジオ」という名称とし、そのロゴやシンボルマークを作成した。現在、商標登録の準備中である。

本システムは、視覚障害者のみならず、健常者にも利用できることが大きな特徴である。視覚障害者ためのシステムという狭いマーケットの中では自ずと限界があり、むしろ健常者が利用できる広いマーケットの中で、障害者にも利用ができる、という考えが大切である。

以下に「てくてくラジオ」の使用用途と、これまで行ってきたサービスの一覧を示す。

てくてくラジオ使用用途一覧

対象地	実施施設、地区	実施時期	利用対象	利用用途、利用方法
観光地 (屋外)	水木しげるロード (境港市)	15 年秋-2 日間 16 年夏-1 ヶ月	・観光客 ・視覚障害者	通り沿いの歩道に設置されている妖怪ブロンズ像ごとに発信機を設置。ブロンズ像に近づくとから妖怪の声が聞こえてくるサービス
	大森町 (大田市)	15 年秋-3 週間	・観光客 ・視覚障害者	古い街並み沿いの寺社や歴史的な建物ごとに発信器を設置。近くを歩くとラジオから建物の説明が聞こえる。
商店街 (屋外)	天神町、白瀧本町 (松江市)	12 年夏-1 日 16 年秋-3 日間	・一般市民 ・視覚障害者	商店街の各店舗にお店の案内を吹き込んだ発信器を設置
	松陰神社商店街 (東京都世田谷区)	16 年春-2 日間	・一般市民 ・視覚障害者	同上
イベント (屋外)	白瀧フェスティバル(松 江市白瀧地区)	16 年秋-1 日間	・一般市民	神社やお寺などの地域のスポットごとにクイズを吹き込んだ発信器を設置。参加者は、ラジオから聞こえるクイズを解いてまわるイベント
	益田アート縁日(益 田市駅前通り)	16 年秋-1 日間	・一般市民	通り沿いの店の前に設置された発信器を探し、ラジオをもってまわり、ふきこまれたクイズを解いてまわるクイズラリー
イベント (屋内)	島根県福祉フェスティ バル(くにびきメ ッセ)	15 年秋-1 日間	・視覚障害者 ・一般市民	イベント会場の様々なブースごとに発信器を設置し、ブースの紹介を吹き込む。入口で渡されるラジオを持ち会場に入ると、ブースの案内が聞こえる。
	松江市福祉フェスティ バル(松江市福祉 センター)	16 年秋-1 日間	・視覚障害者 ・一般市民	同上
	出雲産業見本市(出 雲ドーム)	16 年秋-1 日間	・一般市民	同上
	ららフェスタ(松江 市福祉センター)	16 年秋-1 日間	・視覚障害者	同上
公共施設	美保関新庁舎	16 年秋-常設	・視覚障害者	建物内の玄関、トイレ、受付、エレベーター、カウンターなどに発信器を設置し、それぞれの場所を案内させる。
	スティックビル (松江市)	16 年秋-3 回	・視覚障害者	建物内の玄関、トイレ、エレベーターに発信器を設置し、それぞれの場所を案内させる。
宿泊施設	津和野サンルートホ テル(津和野町)	16 年春-1 日間	・視覚障害者	宿泊施設内のフロント、エレベーター、共用トイレ、宿泊者の部屋の入口等に発信器を設置。それぞれの場所を吹き込む。視覚障害者は、館内を移動する際の案内となる。
	湖陵荘(湖陵町)	16 年秋-1 日間 16 年冬-1 日間	・視覚障害者	同上

16 年度の取り組み事例から

[水木ロードでの1ヶ月間サービス・観光利用]

16年8月、「妖怪ラジオ」という名称のイベントとして1ヶ月間実施した。通り沿いの妖怪ブロンズ像近くに発信器を設置し、主に観光客に利用していただいた。水木ロードの店舗に本部を設け、ラジオの無料貸し出しを行うとともに、発信器の管理を行った。ラジオは、本体100円のイヤホン型のもを用い、目玉おやじのオリジナルシールを貼るとともに、イヤホン、電池をセットにして税込み500円で販売した。販売場所は、本部以外に、水木ロード内の7つの店舗にて店頭販売を行った。その結果、1ヶ月を通じて約500の方がラジオレンタルを利用し、約500の方がラジオを購入、サービスを利用した。また、この中で視覚障害者の方々も約20名利用されている。アンケートの結果からは、視覚障害者、健常者とも非常に満足度が高いことが浮き彫りになり、継続を望む声が多く寄せられた。

その一方、水木ロードのサービスにおいては、現地にスタッフを最低1名いることとしたが、ラジオの販売利益のみで人件費をまかなうことに難があることも浮き彫りとなった。

また、発信器の電源が電池であったため、その日ごとに発信器の設置、回収をするとともに、電池交換の手間が必要となった。AC電源を前提とした発信器の常設とともに、ラジオを店頭販売のみで運営できる体制をつくることが不可欠である。システムの本格導入（発信器の常設）にあたっては、地元商店街、行政、観光協会等との調整が多く残されている。

[やさしさ通り in 白潟・商店街の活性化]

松江青年会議所が主催する「やさしさ通り in 白潟」という催しが、天神町、白潟本町の両商店街を舞台に実施されることになった。障害者にやさしいまちづくりをテーマにしたイベントの一環として、「てくてくラジオ」サービスの依頼を受けることになった。9月25日、10月25日、11月25日の3回、歩行者天国となる天神市にあわせて実施された。発信器を両商店街の35の店舗に設置し、お店自慢や商品自慢を吹き込んでもらった。チラシ、ポスターのほか、新聞、テレビなどマスコミを介して本イベントの告知がなされ、各回40名～80名の参加者を得た。ラジオは、100円ショップのイヤホン型のもを用い、参加者には無料で配布とした。オリジナルシールを貼るとともに、白潟天満宮にてお祓いを受け、のちのち利用してもらえるよう工夫を凝らした。また、ラジオを聞いて商品を購入された方には抽選でプレゼントが出されるという新しいアイデアも取り入れられることになった。

3回を通じて視覚障害者の参加者は約20名程度であり、利用者からは好評を得た。一方、発信器を設置した店主の評価の方は、一部の店主には好評であったものの、すべての店主にメリットが生まれたわけではなかった。今回は、青年会議所が運営に関する費用の負担を行ったが、商店街、もしくは各店舗が費用負担をすることについて、合意形成を行うためには、時間がかかりそうである。

[美保関町新庁舎への導入・視覚障害者の移動支援]

美保関町の新庁舎建設にあたっては、障害者にもやさしい計画、設計が求められた。新庁舎の設計者より、本システムの導入について相談を受けたのは平成16年の春である。建物に設置する視覚障害者のための音声案内システムは、すでに複数のメーカーがそれぞれの方式で商品を出しているが、いずれも非常に高価なものである。新庁舎の設計にあたって、設計者は、発信器が安

価であり、特殊な端末を必要としない点を評価し、最終的には町役場が承認するかたちで、本システムの導入が決まった。

建物は、鉄筋コンクリート造であり、12cm×18cm×5cm のボックスを壁面に埋め込み、その内部に発信器を設置した。設置個所は玄関、受付、トイレの入口、エレベーター、そしてカウンターなど合計 15 カ所である。カウンターについては、年月とともにその案内内容が変化することが十分に予想されたため、役場の女性職員に吹き込みを依頼し、それ以外についてはプロのアナウンサーに録音を依頼した。役場の公開日に、島根県視覚障害者協会の小川会長をはじめとして5名の視覚障害者にお越しいただき、システムを体験していただいたが、「安心して施設内を移動できる。」と、満足のいく感想をいただいた。

施設への常設というはじめての経験のため、何度となく庁舎を往復することになった。設計から設置にいたるまで、効率的なマネジメントが今後の課題である。

なお、庁舎への導入は、新聞のみならず、NHK にもとりあげられ、対外的な PR ともなった。

[湖陵荘でのサービス・宿泊施設での視覚障害者の支援]

国民宿舎湖陵荘において、16年12月の初頭に、視覚障害者のグループである島根県網膜色素変成症の会（以下 JRPS）の会合が1泊2日で開かれた。約20名の視覚障害者とその介助者を含めて40名ほどの会合である。以前に別の視覚障害者団体の宿泊会合において、本システムを1晩の仮設で導入実験したところ、利用者から好評であったことなどから、JRPSより、本システムの仮設を依頼されることになった。

発信器を施設内のカウンターや共用トイレ、エレベーター前、宴会場、そして宿泊者の各部屋の入口前など合計約30カ所に設置した。ラジオは、事前の案内から持参してくる方が約半数、それ以外の方には貸し出しをした。JRPSの方々は、約半数が全盲、半数が弱視である。弱視の方は、概ね館内を不自由なく移動できるが、部屋番号が見えず、苦労される。本システムの設置によって、手持ちのラジオから部屋の番号とともに宿泊者の名前が聞こえるために、非常に役立っていたようである。全盲の方は、盲導犬の使用者と、介助の方がいる方に分かれるが、位置情報を得ることができるので、安心だという声を多くいただいた。

宿泊施設と視覚障害者の組み合わせで、本システムを仮設する、という利用方法については、今後、さらなる需要が見込まれることが予感された。



システムの普及に向けて・NPO 法人プロジェクトゆうあいの連携

16年7月に、障害者の自立支援と情報化推進、人にやさしいまちづくりを取り組みの柱としたNPO 法人プロジェクトゆうあいが設立された。理事長は全盲の視覚障害者であり、本システムの開発に当初より携わっている三輪利春氏である。16年度の取り組みの多くはプロジェクトゆうあいのネットワークや人的な協力を受けて実施されたが、今後もその連携を深めながら、いよいよ全国に向けての展開がはじまろうとしている。